大塚敬節
矢数道明 責任編集

近世漢方医学書集成

63

長沢道寿

名著出版刊

南京中医药大学图书馆版权所有

近世漢方医学書集成 63 長沢道寿 第Ⅲ期 全40巻

昭和五十七年九月二十五日 発行

編者 大塚敬節 矢数道明

発行者 中村安孝

発行所 株式会社 名著出版
東京都文京区小石川三ノ十ノ五
電話東京(八一五)一一七〇番(代)
振替口座 東京七—一〇七四〇番

予約限定版

製版所 株式会社 日本写真製版社

印刷所 有限会社 伊藤印刷

製本所 辻本製本所

落丁本・乱丁本はお取替えします。

3347－0961－8324

責任編集

大塚敬節

矢数道明

編集委員

山田光胤

寺師睦宗

大塚恭男

矢数圭堂

松田邦夫

凡　例

一、本書第六十三巻「長沢道寿」には、『医方口訣集』（巻頭書名『新増愚按口訣集』）を収録した。

一、本書は全て影印版によって収録したが、影印にあたっては次のようにした。

イ、新たに柱と頁数を付した。

ロ、底本を縮少し、一頁に半丁ずつ収めた。

ハ、裏表紙や記事のない白紙は省略した。

ニ、底本にある蔵書印及び書き込みは省略した。

ホ、印刷不明な箇所は、他の版本等により補正したところもある。

一、底本は次の通りである。

医方口訣集　版本　（延宝九年版）　三巻三冊　（寺師睦宗氏所蔵）

一、解説は大塚恭男（北里研究所付属東洋医学総合研究所副所長）が執筆した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

『医方口訣集』と長沢道寿、中山三柳、北山友松子

大塚恭男

三種の『医方口訣集』

『医方口訣集』または『愚按口訣集』が、長沢道寿によって初めて著わされた年次は明らかではない。道寿の門人の一人、中山三柳が師の原本に増訂を加えた折に寄せた序文によると、「私が嘗て笈を負い、仁和寺傍村に隠棲されていた道寿先生の許で親しく教えを受けていた時」のことであったらしい。道寿は、後述するように少なくとも慶長一六年（一六一一）までは土佐に在住していた筈であるので、慶長・元和の間のことであったと思われる。

この原『医方口訣集』は門人がいわば「門外不出」の形で秘蔵していたが、いつのまにか門外

に流出し、遂に版本にまでなったという。のちに中山三柳が伊州に在った時、その文章の正誤錯雑していたのを悲しみ、誤りを正し、増補する作業を続けること二〇年余に及んだという。そして原本が一巻本であったのをここにみられるような三巻本として、寛文一二年（一六七二）に版にのせた。

その後、北山友松子がさらに口訣を増補し、『増広口訣集』として、延宝八年（一六八〇）末に稿を終え、翌九年に刊行した。

従って『愚按口訣集』ないしは『医方口訣集』と呼ばれるものには、長沢道寿の原本、中山三柳の増訂本、北山友松子の増広本の三種が存在したわけであるが、最後のいわば決定稿ともいうべき増広本が出るに及んで、前二者は必要性を失い、いずれも散佚してしまったものと思われる。

長沢道寿の生涯と業績

長沢道寿はまた土佐道寿とも呼ばれる。田代三喜が古河三喜、永田徳本が甲斐徳本と呼ばれたのと同じように、その活躍した土地の名を冠することが当時行われていたためと浅田宗伯は『皇国名医伝』に記している。しかし、田代三喜は古河の出身ではなく、川越あるいは越生の産といわれており、後年古河に在って活躍したのであるのと同様に、長沢道寿もまた土佐の出身ではなかったらしい。道寿の父長沢理慶は阿波の人といわれ、のち京都に出て足利幕府に仕え、河内の

国に所領を得ていたが、天正の頃に浪人して京都に移り、医を業としたといわれる。天正一三年（一五八五）山内一豊が近江の長浜で理慶とその嫡子理成を召出し、慶長六年（一六〇一）一豊が土佐に移った時に、随従して、土佐藩の最初の医官として仕えたという。

道寿は理慶の次子として京都に生まれたと思われ、同地で成人に達して、医を曲直瀬玄朔に、運気を吉田宗恂に学んだといわれる。慶長六年に土佐に移ったのは前述した通りで、のち慶長一六年（一六一一）に父理慶が没するに及んで、遺禄二百石を襲った。

曲直瀬玄朔（一五四九―一六三一）は、曲直瀬正盛道三（一五〇七―一五九四）の妹の子で正盛の養子となり、二代目道三を称し、後世派の基礎を確立した人物である。その伝記は本集成六巻の『曲直瀬玄朔』篇に矢数道明氏によって詳述されているので、ここでは繰り返さない。

吉田宗恂（一五五六―一六一〇）は宗桂の次子である。宗桂は遣明使策彦周良に従って二回渡明し、名医のほまれが高かった。また宗恂の兄は、大規模な土木工事や海外貿易で知られる実業家の角倉了意である。

宗恂は初名光政、孫次郎ともいい、民部卿、法眼に叙された。号を意安または玄子と称した。元亀三年（一五七二）父宗桂が没するに及び、家業を継ぎ、医名が高かった。経学を好み、藤原惺窩と親しく、豊臣秀次に仕えた。慶長五年（一六〇〇）後陽成院の御病気を治したといわれる。のち徳川家康に仕え、山城国紀伊・綴喜両郡に采地五百石を受け、隔年江戸に参候した。著書に

『素問講義』、『難経註疏』、『医経小学』、『纂類本草』、『名医伝略』、『古今医案』などがある。

さて、話を道寿にもどそう。道寿はその後故あって勤めを辞し、二児を兄理成に托して単身京都に上り、御室に居を定め、初め柳庵と号していたが、のち改めて丹陽坊また売薬山人と号した。織田常真公信雄に四百石で召し出されたが幾許もなく辞し、仁和寺傍の双ヶ岡に隠棲して医業に従事していた。山内家の家老野中直継が藩主忠義の治病のために土佐に招き、側医に推挙したが、これをも辞退して京都に移り、寛永一四年（一六三七）九月一四日に没した。

道寿が修業中の頃、博覧強記を自負していたが、たまたま近隣に一人の老医があって、その医術に秀れていることが評判であった。道寿が難治の症例にであった時に、その老医を紹介して診てもらうと、百発百中といってよいぐらいに治ってしまうので、始めて自分の技術の未熟なことに思い至り、その老医に弟子入りしようとした。しかし、老医は受けず、「私には特別な才能があるわけではありませんが、若い頃から『万病回春』を熟読して手離すことがありませんでした。そうしてこの年になって考えてみると、何らか得るところがあったように思います。とても人さまの先生などになる器ではありません」と云って、その所蔵している『万病回春』八巻を示したという。見てみると、文字通り韋編が断絶し、紙は爛れていて、収拾のつかない態のものであり、ここで道寿は大いに恥じて、一層研鑽に専心したという。

道寿は前述したように曲直瀬玄朔の学統につながる者であるが、道寿の学問について浅田宗伯

は『皇国名医伝』の中で、次のように述べている。「その学、素難（素問と難経）を祖述し、李朱（李杲と朱震亨）に折衷し、尤も精を薬品に到す。大阪堺市の薬舗、今に至るまで薬の良なるものを称して土佐用という」がそれである。

道寿が特に親交を結んでいたのは古林見宜（一五七九―一六五七）であった。見宜は明国に留学して医名の高かった祐村の孫で、家方を継承し、さらに曲直瀬正純に師事して李朱医学に精通した人物である。道寿の病が重くなった折、門人たちが他医を迎えようとした。その時、道寿は「吾が疾いおさむべからず。思うに爾ら我に厚し。寧ろその志を傷らんか。今世の医、見宜に踰る者なし。我がために一来を請え」と言ったという。たまたま大阪にいた見宜がその報を得て、すぐに駈けつけたが、診察して云うには、「子自ら治を為し、方間然するところ無し。嗚乎これを亡えり。命なるかな」と述べたという。

道寿はまた朱子の小大学の意に倣って、医学進修の課程を定めたことがあった。それによると小学は次の七科から成る。一、凡そ三百余種の薬について、その陰陽・気味・効能を弁ずる。二、古方三百余種について、その本旨と製方を弁ずる。三、五十門にわたる治療の大法を識ること。四、凡そ五百余条にわたる古医案を読んで、自らの判断で処方すること。五、弁脈。六、針灸で百余所の腧穴の所在を弁ずること。七、経方を羽翼する十余部の医書を講習すること。

道寿はさらに大倉公淳于意がその師の公乗陽慶から受けたという黄帝扁鵲脈書上下経、五色診、

奇恒、揆度、薬論、石神、陰陽外変、接陰陽などの術に則って、大学八科を設けた。一、経絡腧穴の終始する所を審かにして病の所在を識ること。二、栄衛循行の度数を審かにして病の所在を識ること。三、筋骨、皮部、血絡、分肉、九竅の分尺を審かにして病の所在を識ること。四、蔵府の形象統属を審かにすること。五、気運の常変を審かにして病機を察すること。六、四診法を審かにすること。七、死生を決すること。八、八風虚邪の乗ずる所、労倦、飲食、色欲、諸傷を審かにし、以て針灸薬治方を定むること。

以上の小学七科、大学八科を医師の修学の指針としたのだが、道寿はこれらのすべてを身を以て躬行したといわれている。

道寿の著書には、ここに採録する『医方口訣集』のほかに、『薮医問答』、『治例問答』らのあることが知られている。

道寿の長子潜軒は名を虎、字を小貳といった。父が土佐を去ったのちも土佐に留まり、伯父理成の許で医を学び、また小倉三省、野中兼山に儒を学び、さらに天文・暦術にも通じていた。壮年になって江戸に至り、のち京都に移り、一時播州赤穂侯に仕えた。父業を継ぎ、二代目道寿を号し、家名を墜さなかったというが、延宝四年（一六七六）に没した。

中山三柳

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

中山三柳は名を忠義、花陽軒と号した。大和の人で津侯に仕えたが、のちに辞して京都に行き、当時仁和寺傍村に隠棲していた長沢道寿に師事した。伊州に在った時、師道寿の『医方口訣集』の増訂に苦心したことは先述した通りである。

また一時濃州大垣の戸田左門に仕官したが、病気を理由に暇を乞うたところ許されなかったので、二度と匙を取らぬことを条件に暇を申し請けて、京都に移った。しかし患者が多く訪れたので、已むなく門人に調薬させたという。後水尾天皇の御病気の折にも治療にあたったが、のち醍醐に隠居した時、「罪なくてさすらふる身の楽を今朝の寝さめに先づ覚えぬる」の歌を詠んだところ、天皇が「先達て入りし心のなれぬつき今住みそめし山の奥にも」の御製を賜わったという。貞享元年（一六八四）六月二〇日没した。著書には『増補医方口訣集』のほかに、『切要方義』、『病家要覧遂生雑記』、『醍醐随筆』、『飛鳥川』、『蹄疾集』、『保児三方』などが知られている。

北山友松子

北山友松子は名を道長、通称を寿安と云った。友松子はその号であるが、別に仁寿庵、逃禅堂等とも号した。明の人で長崎に亡命してきた馬栄宇と長崎・丸山の遊女の間に生まれた。友松子は北山という日本名に改めたが、幼時から閩語（福建語）を善くした。承応二年（一六五三）に明から亡命してきた戴曼公に師事したが、戴曼公は在明時に晩年の龔廷賢（『万病回春』の著者）

に親炙した人物である。ほかに小倉の医師原長庵にも学んだという。一時小倉侯に仕官したが、幾許もなく辞して京都、大阪に至り、結局大阪の町の気風が気に入って同市道修谷に居を卜した。

人となりは剛直で、歯にもの着せず論駁したが、医師としての自らを律するにはきびしかったという。名利にこだわらず、富豪が分不相応に少ない謝礼をすれば責めるが、貧者には薬ばかりでなく米や銭までも与えるという具合であった。当時の大方の医師はいわゆる「死生を決して青囊を探る」の語の如く、予後不良の患者を治療することを避けたが、友松子は瀕死の患者であっても、診を乞われれば与う限りの努力をした。この点は天命論を主唱した吉益東洞と揆を一にしているが、時代的には東洞より遙かに早いだけに、一応苦労が多かったことと思われる。もし、不幸にして死亡した場合には、医師は医療に対する報酬を期待できないのが普通であった時代だったからである。従って生涯清貧に甘んじた友松子であったが、ある時紀州侯（一説に尾張侯）の病を治した時、門に張紙をして、「この度紀州侯の病を治療し、多額の謝金をいただいたので借債のある向きは取りに来られたし」と書いたという。

友松子は生前に不動明王の石像を作らせ、「等身石像、爾生前是誰、吾死後是爾、截断死和生、爾吾空也耳、北山友松子並題」の文字を刻んでおいた。元禄一四年（一七〇一）三月三日に不動明王像の下の石室中にこもり、読経し鐘をたたいた。その鐘の音が絶えたのが一五日だったので、人々はその日を以て命日としたという。

友松子には、ここに採録する『増広医方口訣集』のほかに『北山医按』、『北山医話』、『方考評議』、『方考繩愆』、『刪補衆方規矩』、『医方大成論抄』、『纂言方考首書』、『友松子語録』などが知られている。

『増広口訣集』について

『医方口訣集』のいわば決定版として、長沢道寿編集、中山三柳新増、北山友松子増広になるいわゆる『増広口訣集』が延宝九年（一六八一）に刊行されるに至った経緯は、前述した通りである。

本書は三巻からなっているが、その構成は次の通りである。

上巻の巻頭には「寛文十二壬子春三月望花陽軒三柳法眼書于西京之隠処」の署名のある「新増愚按口訣集序」があり、それに続いて長沢道寿の選んだ五一方についての口訣が記されている。各頁を上下に二分し、下欄は長沢道寿の原文と中山三柳の新増分を、そして上欄は北山友松子の増広分となっている。中山三柳の新増部分は増新の印を付して原文と区別している。

中巻には中山三柳の選んだ六〇方が載せられている。従って、この巻には長沢道寿は全く関与していない。各頁を上下二欄に分かつ形式は、上巻同様である。

下巻は丸散方のみを集めている。このうち長沢道寿の選んだものが三五方、中山三柳の追加し

たものが十八方で、合計五三方について記されている。記述の形式は他巻と同様である。

従って、全巻で一六四方について三人の秀れた医師の口訣が述べられているわけである。なお下巻の巻尾には、「延宝庚申冬日名草山下秋田秀謹書於五松軒」の署名のある「増広口訣集後序」が載せられている。北山友松子の門人秋田秀の筆になるものである。

〔参考文献〕

- 浅田宗伯　『皇国名医伝』　一八五一年
- 中島鹿吉　『土佐名医列伝』　青楓会・一九三五年
- 平尾道雄　『土佐医学史考』　高知市民図書館・一九七七年
- 富士川游　『日本医学史』　日新書院・一九四一年
- 富士川游　『日本医学史綱要』　日本医史学会・一九三二年
- 竹岡友三　『医家人名辞典』　南江堂・一九三一年
- 京都府医師会　『京都の医学史』　京都府医師会・一九八〇年

長沢 道寿

目次

凡例……七
解説……大塚恭男……九
医方口訣集
序……五
上巻……七
二陳湯……九
四物湯……一八
加味平胃散……二九
葛花解醒湯……三三
六君子湯……三六
十全大補湯……四〇
調中益気湯……四七
升陽益胃湯……五一
参苓白朮散……五四
四君子湯……一四
黄連解毒湯……二五
六鬱湯……三一
生脈散……三五
八物湯……三九
補中益気湯……四三
升陽順気湯……五〇
錢氏益黄散……五三
錢氏白朮散……五五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com